

主 題：主からの祝福を忘れない 6
 聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章7b節

私たちが信仰者として日々歩いていくためには、主が私たちに与えてくださった祝福をしっかりと覚え続けることが必要だとパウロは教えます。今日、私たちが学ぶ七つ目の祝福は「再臨の約束」です。

☆主からの祝福

7. 再臨の約束 7b節

「…また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待っています。」、ここでパウロは二つのことを教えています。「熱心に」と「待つ」です。では、いったい何を待っているのか？「私たちの主イエス・キリストの現れ」です。明らかに、この箇所が教えているのは「イエス・キリストの再臨」のことです。

「再臨の約束」という祝福を神は私たち信仰者に与えてくださったのです。ということで、私たちは今日この祝福をごいっしょに学んでいきたいと思えます。

1. 再臨の確実性

再臨は必ず起こるといふその確実性について「熱心に…待っています」と記しています。この「熱心に待っている」というには「ある将来の出来事を熱心に心待ちにしながら待っている」ということです。ただの希望ではない。必ず起こるといふその出来事を心待ちにしながら熱心に待っているのです。また、

このことばは「期待をもって忍耐をもって待つ」ということ、そして、そのための用意や備えが出来ているという状態です。しかも、この動詞を現在形で使っていることは、まさに、継続してそのような状態を保ち続けている、継続して待ち続けている様子を表わしています。

なぜ、そのようにイエス・キリストの再臨を待ち続けているのか？

1) 主の約束 : 主がそのように約束されました。イエスがご自分の「死」について話したとき、弟子たちはそれを聞いて動揺します。そこでイエスは「:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」(ヨハネ14:2、3)と話されました。ですから、イエスが再びやって来るということをご自分でそのように言われたのです。

思い出しませんか？弟子たちがイエスに質問します。マタイ24:3「イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」、「あなたの来られる時」と「世の終わり」にその前兆について弟子たちは質問をしたのです。また、黙示録でも22:12「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」とされています。ですから、イエスご自身が「わたしはすぐに来る」と再臨のことを約束されているのです。だから、私たちはそれを待っているのです。

2) 天使が告げた : また同時に、天使もそのことを約束しました。イエスが天に凱旋されたその様子を見ていた弟子たちに対して「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」(使徒1:11)とされています。だから、天使も主イエス・キリストがもう一度帰って来るということを告げたのです。

3) 預言者が約束 : また、旧約の預言者もそのことを約束しています。ダニエルはダニエル書7:13-14で「:13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。:14 この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」と告げています。

ですから、このようにみことばを見ると、確かに、主イエス・キリストは再臨されるということを教えています。イエスは再び帰って来られる。こうして「再臨」と言ったときに、皆さんは「空中再臨」なのか「地上再臨」なのかを考えるかもしれませんが、両方をまとめて話しています。今、焦点を当てているのは「イエスは帰って来られる」ということです。マタイ24、25章はイエスが地上に帰って来ることが書かれています。そして、Ⅱテサロニケ4章には、イエスが空中に帰って来られることが記されています。今、学んでいこうとしているのは「イエスが確実に帰って来る」ということです。

このイエス・キリストの再臨を私たちは待っていると、ここに記されていますが、この「主イエスの

再臨を待つ」ということは、だれかからそのように言われたからではなく、実は、救いに与った者たちみは「イエス・キリストの再臨を待ち望む」と教えるのです。

4) 救われた : ですから、「再臨を待ち望んでいる人たちは救いに与った人たちだ」と、そのように言うことができます。テトス2:11-13にそのことが教えられています。パウロは「神の恵み」について、「救い」について教えています。「:11 というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、:12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。」

◎「神の恵み」に関する二つのこと

(1) 救い主の誕生 11節 = 11節に「現れ」ということばがあります。この動詞は「見えるようになる」という意味で、しかも、このことばが文頭にあるということは強調されているからです。何のことか？何が見えるようになるのか？神が人としてこの世に来られ、私たちに見えるようになったということです。つまり、イエス・キリストの誕生のことです。しかも、この動詞の時制を見るとこれは歴史上の事実だということをごここで教えているのです。

(2) 救い主のみわざ 12-13節 : そして、お生まれになったイエスがいったい何を私たち人間のためにしてくださるのか、そのみわざについて後の箇所が教えてくれます。11節に「すべての人を救う神の恵みが現れ、」とあります。つまり、イエス・キリストはすべての人を罪から救い出すための力があるということです。イエスはどんな罪でも赦すことができます。イエス・キリストの十字架によって成し遂げられたみわざは、どんな罪をも赦す力をもっています。もちろん、聖書には「赦されない罪」についても記されていますが、それはこの「神の救いを拒み続ける罪」です。それではそこに救いはないのです。でも、どんな罪人でも主の前に救いを求めて出て来るなら、救いは与えられるのです。

ですから、この箇所が教えているのは、すべての人を救うことができるその「神の恵み」です。私たちの行いによって救われるのではない、神が救ってくださるのです。そのことを先ず、パウロは記した後、救いとはどういうものかを教えています。

*「救い」は新しい生き方をもちらす 12-13節

12節に「私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」

と、否定的なことと肯定的なことが記されています。

・否定的 : 「捨てる」、救いとはこういうものを「捨てる」ことだと言います。それはかつて私たちが愛して来た生き方です。「不敬虔とこの世の欲とを捨て、」とあります。

(1) 不敬虔 = 私たちは神を全く無視して神でないものを神として崇めて来ました。その不敬虔な歩み、生き方です。ローマ1:21、28「21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。…:28 また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりまし。」

(2) この世の欲 = 私たちはこの世を愛してこの世の欲に沿って生きて来ました。

私たちはこれらのものを捨てたのです。

・肯定的 : 「生活し」「この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」

(1) 慎み深く = 賢く自制心をもって、箴言14:16-17「:16 知恵のある者は用心深くて悪を避け、愚かな者は怒りやすくて自信が強い。:17 短気な者は愚かなことをする。悪をたくらむ者は憎まれる。」

(2) 正しく = 人に対しても正しく

(3) 敬虔に = 神に対して敬虔に、つまり、神に忠実に従順に生きることです。

「生活し、」という動詞を見てください。このことばの前に(1)(2)(3)と三つの副詞が置かれています。それはこれらが新しく生まれ変わった人、真のキリスト者の特徴だということです。ですから、何度も私たちは学んでいますが、救いとは神によって新しく造り変えられることです。もちろん、罪を犯さない人間になったのではありません。でも、かつての罪を捨てて新しく生まれ変わり、このような特徴をもって生きる人へと造り変えられたと、パウロは教えるのです。

もう一つ、13節「祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。」とあります。

*「教えさとした」

(4) 希望 = 希望をもって生きる

- ・待ち望む : 継続して待ち焦がれている、未来の出来事に期待をもって、場所やある状態に留まり続けるのです。いったい、何を期待しながら待っているのでしょうか？
- ・現れ : 「大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを」とあります。つまり、再臨のことです。ですから、今見て来たように、私たちは新しい生き方をする者へと変えられた。その新しい生き方の中にこの「救い主を待つ」という生き方が含まれているのです。ですから、イエス・キリストの救いに与った者たちは、イエス・キリストが帰って来ることを待ち望む者たちです。

パウロはピリピ3：20で「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」と語っています。私たちの国籍が天にあるだけでなく、そこから主イエス・キリストは私たちを迎えに来てくださる、それを待っていると語ります。

もう一つ見ていただきたいことは、「大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを」、実は、ここにイエス・キリストの神性が記されていることです。「イエスは神だ」ということが記されているのです。「大いなる神であり私たちの救い主」とあります。確かにこの通り、私たちの主であるイエスは神である、救い主であると教えています。この「大いなる神」という文節と「私たちの救い主キリスト・イエス」という文節は「And」で結んでいます。面白い表現は、この二つの文節の前に冠詞が付いていることです。このような並べ方は「同じ人のこと」を語るのです。つまり、パウロは「イエスはいったいだれなのか？イエスは大いなる神であり、そして、救い主だ」と、明確に「イエスは神だ」ということを教えるのです。だから、「イエスが神でない」という人たちに対して、私たちはみことばの教えを通してはっきり言うことができます。イエス・キリストは神であり、神から与えられた唯一の救い主だと。

パウロはこのすばらしい再臨のことを「祝福された望み」として、テトス2：13で語っています。私たちにとって本当に幸せなこと、私たちにとってすばらしい祝福であると、そのことをパウロは今日のテキストの箇所（Iコリント1：7b）で説明しています。

2. 主イエスの再臨

「…また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待っています。」と、「現れ」ということばを使っています。確かに、再臨のことを話しているのですが、パウロは敢えてここで「現れ」ということばを使ったのです。このことばはIコリント15：23で「しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。」、「再臨」と訳されていることばでもないし、マタイ24：37にある「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。…」という「人の子」でもないのです。このIコリント1：7で使われている「現れ」ということばは「覆いを取り除く」という意味です。何か覆われているものが取り除かれるということです。何かははっきりと現れる、明らかに示されるということで、このことばは新約聖書中に18回出て来ますが、その中の8回は「啓示」と訳されています。3回は「黙示」、残った7回は「現れ」と訳しています。つまり、このことばがもっている意味は「今まで知らなかった何かが明らかにされる」ということです。「啓示」や「黙示」と言ったとき、人に隠されていた真理を神ご自身が明らかにされることです。

つまり、パウロが言いたかったことは、この再臨のときにあることが明らかにされるということです。イエスが帰って来られることは間違いのない事実です。そのときに今まで知らなかったことが明らかにされると、そのことを言うのです。では、いったい何が明らかにされるのか？今からそのことを見ていきますが、少なくとも一つ言えることはこうです。イエスが帰って来られるとき、人々はイエスを見ます。そして、この方が言われていた通りのお方であったということに気付くのです。

先ほど、私たちはテトス2章の中で「祝福された望み」としてパウロが語っていることを見ました。私たちクリスチャンにとって再臨は特別な日である、祝福された日だということです。

☆では、どのような祝福をいただくのでしょうか？

1) 主とお会いする : 私たちの愛する主イエスにお会いするのです。これまで私たちはイエスを愛してイエスの教えに従ってイエスを称えながら生きて来ました。でも、だれ一人としてイエスの御顔を拝したことがありません。でも、再臨のときにその御顔を拝するのです。讚美歌の歌詞にあるように、私たちはイエスの御手にある傷を見て、この方が主であることが分かるのです。その日が確実に来るのです。私たちのような者を愛してくださった主にお会いすることができるのです。その方を拝することができます。このことだけでも私たちにとっては大きな祝福だと思いませんか？Iヨハネ3：2に「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリ

ストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とある通りです。このような祝福に私たちは与るのです。

2) 主に似た者へと変えられる : でも、それだけではありません。この再臨のときに、私たちは主に似た者へと変えられるのです。確かに、私たちはイエスを信じたその時から、私たちの中では「聖化」の働きが始まりました。キリストに似た者へと変えられて行くという働きです。言い方を変えると、「変態」の働きです。青虫からさなぎになって成虫になっていくことを変態と言いますが、私たち罪に染まった醜い者たちが栄光のからだへと変えられて行くのです。この変態の働きが完了するのです。いつま

でも「聖化」が続くのではないのです。変態の働きが永遠に続くではありません。終わりが来るのです。

先に見た I ヨハネ 3 : 2 には「…しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。」と書かれています。キリストに似た者へと私たちは変えられるのです。パウロはこのように言っています。ピリピ 3 : 2 1 「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」と。すごいことだと思いますか？その日が来るのです、皆さん！ 確かにイエス・キリストの恵みによって救われた私たち、罪を赦していただいた私たち、しかし、実際の自分の歩みを見たときに情けなくなります。さっきまで神を称えていたのに次の瞬間には神が耳を覆われるようなことを口に行っている…、神を喜ばせたいという思いがありながら、やっていることは神が悲しまれることを選択している…、そんなことの繰り返しです。このような葛藤の中を私たちは生きているのですが、この生活が永遠に続くわけではないのです。終わりが来るのです。私たちがイエスに似た者に変えられたときに、この変態の働きが完了したときに、もう私たちはこの神を悲しませることがなくなるのです。この罪のからだから完全に解放されるその日が来るのです。だから、人々はその日を待ったのです。待望したのです。早くその日が来ることを願ったのです。

3) 主からの報いをいただく : 三つ目に私たちがイエスの再臨が祝福だと言えるのは、そのときに私たちは神からの報いをいただくからです。

☆救いを受け入れた者への報い = あなたの信仰者としての歩みの評価が下るのです。あなたが主イエスのために喜んでして来たことに対して、神はそれにふさわしい報いを与えてくださるのです。もちろん、これが信仰者すべての動機であったとは言えませんが、少なくとも、彼らはそのことを知っていたので、この地上にあって一生懸命主のみことばに従い続けようとしたのです。あの五タラント、二タラントを預かったしもべがしたことは何でしたか？彼らは与えられた務めを一生懸命果たします。ですから、彼らが誉められたのは、彼らが主のみこころに忠実であったことです。

マタイ 25 : 19 - 21 「:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」、主が「しなさい」ということを彼らはしたのです。主が望んでおられることを彼らは心からしたのです。そして、それに対して主人からお誉めのことばがあったのです、「よくやった」と。

少なくとも、そのことを覚えるだけで私たちの信仰者としての歩みの動機づけになりませんか？なぜなら、その日が来るからです。私たちひとり一人神の前に立って神のさばきを受けるのです。だれが見ていなくても、だれから評価されなくとも、すべてを見ておられる神が評価してくださるのです。ですから、パウロが言う通り「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にとってむだでないことを知っているのですから。」

(I コリント 15 : 58)、主のために為すわざは絶対無駄ではないのです。自分のためにすることは永遠の価値がなければ無駄です。でも、主のために喜んで為していることは、そして、主が喜んでくださっていることなら永遠の価値があるのです。ですから、私たちはこうしてイエスのことを考えるだけでなく、イエスにお会いするということがどれほど私たちにとって素晴らしいことなのか、「祝福された望み」とパウロが言った理由が分かります。愛するイエスにお会いし、私たちは完全にイエスに似た者へと変えられ、罪から完全に決別し、そして、私たちの働きに対して神が喜んでくださる。

こうして、主イエスの再臨は私たちにとって祝福の喜びですが、ある人たちにとってはこれは喜びのときではありません。

☆救いを拒んだ者への報い = マタイ 24 : 30 をご覧ください。「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗っ

て来るのを見るのです。」、イエスはこうして地上に帰って来るのです。正確に言えば、ここに書かれてある出来事は患難時代の終わりに起こるのです。人の子が雲に乗ってやって来るのです。そして、人々はその帰って来られる主を見るのです。先ほど、それは私たちにとってとても大きな喜びであると学びました。ところが、この箇所には「地上のあらゆる種族は、悲しみながら…見る」と書かれています。なぜ、彼

らは悲しむのか？その時に彼らは大変なことに気付くからです。彼らがイエス・キリストを見た時に彼らが気付くことは「自分は大変大きな過ちを犯した。この方は言われていた通りの人だ。確かに、この方

は神であり、この方は救い主だ。しかし、私はこの方を受け入れることがなかった。この方を拒み続けていた。」です。だから、彼らは悲しむのです。彼らは分かったからです。救いを逃してしまったことに…。

神が備えてくださった救いは永遠にあるものではありません。最後の一人が救われたら終わるのである。その最後の人がどこにいるのか、どの時代なのかは私たちには分かりません。でも、少なくとも、そんなに遠い先のことはありません。最後の人が救われたら終わるのです。この人たちは、その背景はよく分かりません。でも、主を見て悲しんでいるのは主のことを聞いていたからでしょう。そして、自分たちがこの救い主であるイエス・キリストを、もしかしたら受け入れるチャンスがあったにもかかわらず、

彼らはそれを受け入れようとしなかった。その結果、彼らは悲しむのです。

そして、彼らにはどんなことが待っているのか？彼らにはふさわしい報いが待っているのです。信仰者も信仰者としての歩みにふさわしい報いが与えられることを見て来ましたが、神に逆らった者たちにもそれにふさわしい報いがあるのです。

(1) 救いを拒んだ者へのさばき : 神を知らない人々や私たちの主イエスの福音に従わない人々
Ⅱテサロニケ 1 : 6-9 を見てください。「:6 つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。:8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。:9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」、

a. **苦しみ** : 6節にあるように、彼らが経験するのは「苦しみ」です。私たち人間が経験したことのない苦しみです。マルコ 13 : 19 「その日は、神が天地を創造された初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような苦難の日だからです。」、ダニエル書 12 : 1 「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。」

b. **報復** : Ⅱテサロニケ 1 : 8 に「報復」ということばがあります。神の救いをけなし、嘲り、拒み続けて来た者にふさわしい報いがあるということです。9節には三つのことが書かれています。

・**主の御顔の前から退けられる** = 彼らは神とともに永遠を過ごすことがないということです。先ほど、私たちは主の御顔を拝してこの方を崇める、礼拝すると見ましたが、その特権に彼らは与れないということです。主の御前に立つことが赦されない、主とともに過ごすことが赦されないのです。

・**主の御力の栄光から退けられる** = 主イエス・キリストが栄光をもって栄光とともに再臨される時、その御前から除かれるということです。私たちは栄光ある主と永遠をともに過ごすことができます。その栄光の御座に私たちは立つことが赦されています。でもこの人たちはそうではない。その御前から退けられると言います。

・**永遠の滅びの刑罰を受ける** = この「刑罰」と訳されていることばは「当然の報い、処罰」という意味です。分かり易いことばで言うなら「ペナルティー」です。そして、「受ける」と書かれているこの動詞は「支払う」ということです。ですから、自分がしたことに対してのペナルティー、その罰金を自分が支払うということです。この箇所が教えるのは、自分がやって来たことにふさわしい報いを自分の身に招くこと、自分のやったことにふさわしいペナルティーを払うように、自分が神の前に犯して来た罪に対してそれにふさわしいペナルティーを払うということです。その刑罰とは「永遠の滅び」です。

ここに書かれてある「滅び」というのは、ある人々が信じているような「消滅する」ということではありません。永遠に続くのです。しかも、先ほど見て来たように、この場所は苦しみの場所です。

神に背いて来た人たち、神の救いを拒んで来た人たちを待っているのは、苦しみながら永遠を過ごすというその報いなのです。だから、彼らはイエス・キリストが再臨される時に涙を流すのです。悲しむのです。こうしてみことばは再臨について教えています。

最後に皆さん、今の時代だけでなく昔の時代においても、神の再臨をもって生きた人たち、言い方を変えれば、永遠の希望をもって生きた人たち、そんな信仰の勇者たちが聖書の中に記されています。その彼らの歩みから私たちは大切なことを学ぶことができます。

結論 : 再臨を待望した生き方

1) 天を待望しながら生きる : アブラハム

ヘブル人への手紙 11 : 13 - 16 「:13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。:14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。:15 もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。:16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。」、彼らはこの地上に安住の地を求

めたものではありません。彼らは自分たちは寄留者、旅人であって、自分たちの本当の住まいはここではなく天だということを思いながら生きていたのです。彼らは確かに、ウルにいたときにそこで良い生活をしていました。もし、地上で快適な生活を過ごしたいと思えばできたでしょう。でも、彼らの目は地上ではなかったのです。天を見ていたのです。私たちが旅行に行ったらカバンをもって動きます。なぜなら、自分たちが泊まる所は自分の家ではないからです。私たちには定められた所があるのです。アブラハムはなぜこの世の快適を捨てて神に従っていったのでしょうか？彼は神の約束を信じたのです。神が約束されている住まいは、この地上のどんなに快適なものとも比較できないものであると、その方を優先し求めたのです。

2) 天での祝福を忘れなかった : モーセ

ヘブル 11 : 24 - 26 「:24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、:25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。:26 彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。」、彼は天での祝福を忘れなかったのです。彼は王の子として、しかもエジプト王の子として、この地上の宝をもって楽しむことができたはずですが、でも、彼は地上のどんな宝よりも天を優先したのです。彼が考えていたことは、天において神からいただく報い、その宝の方が地上のどんな宝よりもすばらしいということです。地上に宝を積むことはできたのです。自分のものとすることができたのです。でも、モーセは天に宝を積むことを優先したのです。

私たちの生き方はどうでしょう、皆さん。どんなに地上に宝を積んでも、だれ一人それをもって天に行くことはできません。私たちがフォーカスを当てなければいけないのは、私たちが住む永遠の住まいに宝があるかどうかです。そこに私たちは富を積んでいるかどうかです。もっと言い方を変えれば、私たちがそこに上った時に神が私たちのことをどのように誉めてくださるかです。アブラハムにしてもそうでした。彼のフォーカスは天でした。モーセもそうでした。神からいただく称賛をこの地上のどんな宝よりも価値あるものと見たのです。

私たちはこの地上に一生懸命宝を積もうとしていませんか？この地上での快適さを最優先していませんか？私たちはそんなものをすべて捨てなければいけないと、そんなことを話しているのではありません。私たちがフォーカスを当てなければいけないもの、優先順位の第一番目に持って来なければいけないものは何か？私たちの地上での生活はあっという間に終わるのです。気付いてみると、もう私たちは今の年齢になったのです。もうあっという間に地上での生活は終わってしまいます。その後、私たちは神とともに永遠を過ごすのです。その時を考えながら今を生きるのです。もちろん、私たちは天に上がった時に神を礼拝しながら生きます。でも、私たちが賜物を使って主に仕えることができるのは今だけなのです。今、神は私たちに「働きなさい」とその機会をくださっているのです。主のために永遠のために宝を積むために、今、私たちはこうして地上にあって働くことができるのです。その機会を逃してしまった時に、それは天に宝を積む機会を逃したということになります。

皆さん、主に仕えること、主のために働くことができるのは今なのです。誠実にやっていますか？忠実にやっていますか？貪欲にやっていますか？これらの信仰者たちは、この地上のことではなく天を見据えて生きたのです。

3) 聖さを追求 : キリストの再臨を待望する人たち

天国を待望しながら、イエスにお会いすることを待望しながら生きている人たちは「聖さを追求する人たち」です。イエスが今日帰って来るかもしれないのです。そのことを本当に信じている人は今日をそのようにしようとするではありませんか。イエスが今日帰って来られるとしたら、私たちは自分の生活の中から神が喜ばれないものを除こうとしませんか？もし、今日皆さんの家にだれかがゲストとして来るとしたら掃除をするように、イエスにお会いする日が今日かもしれないと思ったなら、私たちは自分の生活の中から罪を除こうとしませんか？ヨハネは言いました。Ⅰヨハネ3：3「キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と。今日イエスにお会いするかもしれないと思っている人は、罪から離れるのです。

4) 自分の務めに忠実だった : キリストの再臨を待望する人たち

イエスの再臨を待望する人、イエスにお会いすることを待ち焦がれながら生きている人たち、それは先にも触れたように、与えられた自分の務めに忠実に果たすのです。マタイの福音書25章に記されていた五タラント、二タラントを預かったしもべたち、彼らは主人が帰って来ることを信じていました。どれだけ預かったかということではなく、彼らは自分たちに与えられた務めに主人が帰って来るまで、しっかりしなければいけないということが分かっていたのです。そこで彼らは一生懸命、主から与えられた務めを果たし上げていくのです(マタイ25：14-30)。私たちに必要なことは何か？あなたには神は務めを託してくださっている、主が帰って来るそのときまでそれをあなたは忠実に為しているかどうか？そのことを神は問うておられると知ることです。あなたの信仰者としての歩みはどうですか？

あなたは一生懸命、神から与えられ賜物を使って主に仕えていますか？すでに見て来たように、ひとり一人に神から賜物が与えられているから、その賜物を用いて人々の霊的成長に努めていきなさいと言われます。ということは、だれかによってあなたが祝されるのではない、あなたがだれかを祝すということです。あなたが出て行って人々の励ましになるのです。あなたが出て行ってみことばをもって彼らを励まして、彼らが神をより愛する者として変わっていくようにと、その働きを為すために十分な恵みが与えられていることはすでに見て来た通りです。もし、あなたがそのように生きているなら、あなたはその働きを忠実に果たす者になるのです。言い訳はありません。なぜなら、見て来たように、あなたがそれを為すために必要なものは全部与えられているからです。あなたに必要なことは「わかりました、神さまやります！」という応答です。

例えば、この後いろんな人とお話しになるでしょう。くだらない雑談などは止めて、もし、みことばをしっかり心に刻んでいるなら、だれかとこの後時間を持つ時に「主よ、どうぞその人の励ましになるように私を使ってください。どうか、私の語ることばがその人を励ますことができるように。もちろん、私の知恵や力ではそれは不可能です、神さま。あなたの助けが必要です。そして、あなたはそれを約束してくださったからそれを信じます。どうぞ、私を使ってください。」と、そのようにして私たちは生きるのです。神に使っていただくのです。その時に、神の栄光、みわざが現わされるだけでなく、あなた自身の信仰が成長するのです。そうしてあなたは天に宝を積むのです。それを行うかどうかはあなた自身が決めなければいけないことです。

◎再臨を否定する人々 : 皆さん、世の終わりになればなるほどこの再臨を否定する者たちがたくさん出て来ます。ペテロが言った通りです。Ⅱペテロ3：3、4「:3まず第一に、次のことを知っておきなさい。終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、自分たちの欲望に従って生活し、:4次のように言うでしょう。「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」、何も変わっていない、イエスが帰って来ると言っているけどそんな約束はどこにあるのか？何も変わってないと。ということは、神の敵は私たちがイエスが帰って来ることを待ち望みながら生きることを願ってないからです。もし、私たちがみことばが教えるように、今日イエスが帰って来るかもしれないということを本当に心に刻んでそのように生きているなら、そのことを喜ばない存在がいるのです。それを良しとしない存在、「神の敵」です。だから、「再臨なんか無い、ない！」と言います。それでなければ「今日は再臨はないよ。だから、今日は思い通りに生きたらいい。もしかすると明日かもしれない。明日備えをすればいいじゃないか。」と、明日になればまた言うでしょう。「今日ではない、大丈夫！必ず明日来るから、明日また頑張れば良い。今日は好きに生きたらいい！」と。

私たちはそのような偽りのことばに耳を貸したらいけないのです。パウロがペテロが、そして、イエスが、この聖書が私たちに教えてくれたことは、確かに、主は帰って来られるということです。そして、終わりになったら、この再臨を否定する者が増えて来ると言います。なぜなら、「今日イエスが帰って来るかもしれない」とその思いをもって生きる信仰者がいてもらっては困るからです。

あなたはどうか？そんな思いをもって今日生きていますか？それとも、そんな偽りのことばに騙されてしまって「今日は帰って来られない。まだまだ帰って来られない。だから、自分のやりたいことをしましょう…」と、もしそうなら、目を覚ますことです、皆さん！

主は確実に帰って来られる。そして、そのための備えをするのは私たちの務めです。しっかりとみことばに立って、このすばらしい祝福であり、私たちの希望である主の再臨を待望しながら、与えられた一日一日をしっかりと歩んでいきましょう。